

な親を持った二人の娘に御苦労さん、ごめんなさいと伝え私の終戦としたい。

終戦後の北満チチハル

北海道 鈴木衛美

昭和十二年に渡満した両親（中山由造・ミサ）は黒竜江省チチハルで、南台宮飛行場にあった将校クラブ、城内の静修寮、天斉街の独身寮（官公署）の賄業をしていた。

終戦直前は天斉寮だけを扱っていたがその寮の建物はレンガ造りで室数が百二十もある非常に長い建物であった。

戦争が終幕に近づくにつれ、若い人、壮年者は次々召集されて行き警察官、軍事郵政、警護隊員らの方たちと、老齢の高等官の僅かな人達だけが寮員として残っていた。

食糧庫には十分な主食、調味料が確保されていたが、

そのことが帰国までの一年間大いに役立つことになるとは知る由もなかったのである。

日本の戦況が日増しに不利になるにつれて東京・大阪のB29による大空襲が始まった。命からがら逃げてきた人々によってその惨状が伝えられたのであったが満州の場合、B29の飛行距離は新京市止まりで北満までは空爆が及ばずにいたのである。

昭和十八年頃は、まだ映画館やダンスホールなども盛んで市民生活もゆったりした状態で日々を大いに楽しんでた。もちろん防空壕なども掘らずにいたのである。

終戦の年の五月頃、憲兵隊本部の正面にある菊のご紋章が何時の間にか外されていた。ボーイ頭の張さんが母に「近々日本が危ないヨ」と言ったそうであるが、そのことは誰にも言ったらいけないとさとしていたのを耳にしたことがあった。チチハルは、あの有名なパセンザンの本拠地なのだから今から思うとそのような情報などは日本人が知らないだけで現地の人々の間では周知のことだったのである。

終戦直前になって関東軍司令部から市民に対して三日

間の禁足命令が出されたのだが気がついたら軍のどの兵舎も官舎の家族も、既にもぬけのからで、あまりの見事な展開に残された丸腰の市民は怒りよりも、只々茫然と呆れるばかりであった。

あとの頼りは少数の警察官と僅かな自警団くらいであった。煙のように消えた軍隊の兵舎（三浦部隊）の様子を見に行った帰途にソビエトの参戦のニュースを耳にしたのであると同時に関東軍が南下して「通化」まで家族連れで撤退したことを聞いたのだった。

突如としてソビエトに戦線布告された我々は裏口から刃物で刺されたと同然で、以来、毎日定期的に飛来するソ連機の空爆にさらされることとなったのである。幸いなことに、後々の利用価値を考えてのことか、兵舎や家屋には直接爆撃はせずに道路や、窓の辺りに不発弾を落とすことが多かった。

しかし、やはり防空壕の必要があるからと、泥縄式に壕を掘りはじめたのだ。投下される爆弾の間を僅かに残された男性達が掘りはじめてどうにか形になった。

裏の誰もいない兵舎に何発か投下され火柱が高く上が

る。慌てて皆が壕にはいる。飼っているシェパード犬も恐いのか声も出さずに伏せている。

防空壕が完成した頃から日本人会から北辺からの避難民を受け入れるよう依頼があった。いわゆる収容所を開設することになったのである。

両親は元来世話好きなたちなので一も二もなく承諾したのであるが毎日のように続々と老人、婦女子が殆ど着のみ着のままの状態避難してきたのだから落ち着くまでが大変であった。

ソ連がチチハル市の近郊まで迫って来て迫撃砲の凄まじい音が真昼の空に轟き渡る。戦争の実態が背筋を走る。このままでは危ないというので避難して来た人達も一緒に南下した方が良いのではと、八月十五日に、チチハルを脱出することになった。

午前三時頃から食堂に集結して午前五時頃全員隊を整えて駅に向かう。見送りの現地の人々の最前列に張さんがお弁当を作って持って来てくれていた。

妹も私も毎年張さんが作ってくれる餃子と包子がおいしくて幾つ食べられるか競争をして十歳も年下の妹を相手

に自慢したものである。

張さんは叔父さんと二代にわたって我が家の何十人も
のボーイ頭を長年勤めた人で両親の信頼のもっとも厚い
人達であった。

自分達が生活の面倒を見るから日本には帰らないでと
何度も両親を説得しているその目に涙が溢れているので
ある。両親や我々に対する温情からだと思うと胸が熱く
なった。

出発の命令が出ないまま正午近くまで待機していると
日本からの重大なニュースが流れるとのことであった。
そのうち雑音だけがけたたましく鳴り出し、終戦の詔勅
が下された。皆一斉に耳を澄ます。段々と言葉が聞き取
れるようになる。今度はどんな意味なのか内容を理解で
きないのである。すると誰かが、「これは日本の降伏を意
味しているのだ」と言う。ああ、とうとうその日がやっ
て来たのだと、自分を納得させたり、力が抜けたように
地面に寝ころぶ人、目を閉じて黙す人、あちこちから号
泣やすすり泣きが波のように広がって来た。たまらなく
空虚であり深い穴の中に長年つまった泥が一瞬にして落

ちた思いの軽やかな気持でもあった。

二度と帰ることがないであろうと思っていた我が家に
再び複雑な思いで戻ることになったのである。婦女子に
渡されていた青酸カリは白い結晶で小さな茶色のビンに
詰めたままで母はそれを大きい方の浴場の煙筒の中に
蔵ってしまった。男の人達は刀や銃を裏の沼に思いきり
投げ捨てたのである。

敗戦という歴史的な一日は夕日が大陸の広大な空を七
色に染め分けながら、今まさに地平線に落ちようとして
いる。

黒曜石の忠霊塔も、人も、草も、すべてを赤く染めな
がら華麗に日が沈んでゆく……何もかも終わった安堵感
に浸っている暇もなく難民収容の現実が目前にあったの
である。

先ず食えることである。着る物は各部屋にある防空
カーテンをズボンなどに利用させたりして急場をしの
ぎ、大食堂で食べ物の屋台を造り手持の材料でうどんや
そばを打ち売らせたり、足袋、酒など母の得意とする技
術を活用することになった。

避難者の中に新大学のロシア語の先生であった酒田ご夫妻がおられたことも幸いであった。ソ連軍と日本人の通訳を申し出てくれて、この家は難民収容所につき無断でソ連兵の出入りが出来ないようにソ連憲兵隊の許可を取ってくれたり、難民救済の兵舎内の売店や、理髪店または街にスーパーなどを開店してこれらの事業で何百人という多数の人々が辛うじて一年間の飢えをしのぐことになったのである。

このような状況の中で一年が過ぎ、ようやく待ちあぐねていた帰国が決まり市内の日本人が地区別に十二班に分かれ出発、我々は昭和二十一年八月三十一日に出発することに決まったのである。政変のたびに軍票が使えなくなったり、暴徒に襲われる家があったり、毎日ドラマ以上の出来事ばかりであったが我々の収容所は殆ど大きな被害もなく過ごすことが出来た。今思うと両親や、酒田ご夫妻のご努力と苦勞、また収容者の皆さんの結束のたまものと頭の下がる思いである。

収容者の女性が家族のために現地の菓子業者と結婚した人、軍事郵政で家族寮に移住し、スパイ容疑でメー

デーの昼下がりに公園で銃殺刑になった夫妻、終戦の翌朝収容所裏庭で自爆した警護隊の山田さん、中国八路军に入った若い人など、これら幾人かを除き八月三十一日の正午過ぎ、チチハルの駅をあとにしたのであった。家で飼っていたシェパード犬が新しい飼い主と駅まで見送りに来ていたが、我々を見ると列車の後を追ってどこまでもついて来たがいつの間にか姿が見えなくなってしまった。母と妹が名前を呼んで泣いていたのが忘れられない。

十月初旬、日本に到着した。他国の地で無念の思いを残して亡くなった方々の霊安かれと祈るとともに、これから絶対に風化させてはいけない歴史の幾ページであったのだと強く感ずる昨今である。

満州から引揚げるまでの労苦に耐えて

北海道 宮腰 ふみ

北満近くの城西河という所でした。